

## セラピアス・リングア「オリビア」について

夏井高人

セラピアス・リングア「オリビア」(*Serapias lingua* 'Olivia') という名で流通している欧州蘭がある。セラピアス・リングアの赤花と考えられていたのだろう。

また、「スペイン産濃色赤花セラピアス」として流通していることもある。セラピアス・コルディゲラ (*Serapias cordigera*) だと考えられたこともある。セラピアス・コルディゲラはスペイン、ポルトガル、イタリア、ギリシア等に広く分布し、自生する地域によって形質が著しく異なることがあるため細かく変種が分類されてきたけれども、最近では、自然交雑由来の種類のもが含まれていることが判明し、また、花の色だけで識別することはできないとして、大きなグループにまとめ、単純にセラピアス・コルディゲラまたはその自然交雑種として扱う見解が有力なようだ。ただし、そもそもセラピアス・コルディゲラそれ自体が自然交雑由来であるかもしれないので、今後更に分類変更となる可能性が大きい。ともあれ、濃い赤色の唇弁をもっていることが標準的なセラピアス・リングア (*Serapias lingua*) とは異なることから、「スペイン産濃色赤花セラピアス」あるいは「セラピアス・コルディゲラ」として考えられることになったのだろうと思う。

他方、セラピアス・オルビア (*Serapias olbia*) として分類されてきたセラピアスの一種もある。最近では、セラピアス・コルディゲラの変種として扱う見解もあるから、その見解に従えば、セラピアス・オルビアはセラピアス・コルディゲラであることになる。ただし、セラピアス・オルビアは、セラピアス・リングアとセラピアス・パービフロラとの間の自然交雑 (*Serapias lingua* × *Serapias parviflora*) だとする見解もある。

さて、何年か前になるが、セラピアス・リングア「オリビア」

として売られているランに興味を持ち、継続的に栽培するとともに、細かく観察して考察を続けてきた。その結果、セラピアス・リングア「オリビア」は、セラピアス・オルビアであり、ただ、流通過程で誤記や勘違い等があって「オリビア」という名になってしまったのだろうという結論を得た。

ところが、一説によると、「オリビア」は、セラピアス・リングアとアナカンブティス・モリオ (*Anacamptis morio* (Syn. *Orchis morio*)) との人工交配品であるセラピカンブティス・カピタータ (*Serapicamptis capitata* (Syn. *Orchiserapias capitata*)) という。この交配品と同一の組み合わせによる自然交雑種 (*Anacamptis morio* × *Serapias lingua*) は存在しており、フランスとバルカン半島の一部に自生している。

私は、外見上全く異なる植物だと思っていたのだが、残念なことに、セラピカンブティス・カピタータの実物を保有していなかった。そのため、比較検討をすることができなかった。

ところが、昨年、たまたま I 氏から今年の開花を待ち、両者をオルキセラピアス・カピタータ「レディサマンサ」 (*Orchiserapias capitata* 'Lady Samanthar') として流通しているランの無償分譲を受けた。これは、まさにセラピカンブティス・カピタータの人工交配品に他ならない。自然交雑種の多くは赤色の唇弁をしているのに対し、「レディサマンサ」は美しい紫色をしているところに特徴がある。おそらく、標準的なアナカンブティス・モリオではなく、濃い紫色の花を咲かせるタイプのアナカンブティス・モリオ・ロンギコルヌ (*Anacamptis morio* subsp. *longicornu* (Syn. *Orchis longicornu*)) を片方の交配親につかった人工交配品なのではないかと思われる。

そして、その両者の栽培を継続したところ、幸いにも両者とも立派に開花してくれたので、花を分解して調べてみた。

分解して並べた状態を写真に撮影。写真の左側が「レディサマンサ」で、写真の右側が「オリビア」だ。



この写真を観ればわかるとおり、「レディサマンサ」では側花弁が退化して消滅してしまっている。「オリビア」の側花弁はオタマジャクシのような形をしており、2枚ある。つまり、「レディサマンサ」は3ガク片+唇弁という構造になっているのに対し、「オリビア」では3ガク片+2側花弁+唇弁という構造になっていることを理解することができる。

そして、「オリビア」の分解写真をスイス・オーキッド・ファンデーションの Web サイト（データベース）で公開されているセラピアス・オルビアの標本写真と比較してみると、「オリビア」の特徴がセラピアス・オルビアの特徴とほぼ完全に一致していることを理解することができる。

Swiss Orchid Foundation (SOF): *Serapias olbia* Verg.

[http://orchid.unibas.ch/phpMyHerbarium/2000469/1/Serapias/olbia/Verguin\\_Louis/specimen.php](http://orchid.unibas.ch/phpMyHerbarium/2000469/1/Serapias/olbia/Verguin_Louis/specimen.php)

このような検討結果から、「オリビア」として流通しているランは、セラピアス・オルビア（セラピアス・コルディゲラ的一种

として分類する立場ではセラピアス・コルディゲラ)だと理解するのが正しいと思われる。少なくとも、セラピカンプティス・カピタータではない。

残る問題は、「オリビア」を「セラピカンプティス・カピタータ」だと主張した方が実在し、実際に人工交配を試みた結果として「オリビア」を作出したと仮定した場合にどうなるかだ。

私は、その場合には、人工交配の失敗があったのだと理解している。

ラン科植物では、実際に遺伝子交換がなされなくても、花粉塊がずい柱の雌蕊に相当する部分に付着した刺激だけで単為生殖が発生してしまう例があることが広く知られている。

あくまでも想像の域を出ないが、あり得る仮説の一つとしては、アナカンプティスの仲間の花粉を用いてセラピアス・オルビアまたはセラピアス・コルディゲラとの人工交配を試みたが、結果として単為生殖が発生してしまった場合などには、要するに、セラピアス・オルビアまたはセラピアス・コルディゲラの種子ができるのであり、その種子を用いた実生フラスコ苗の中には親よりも濃厚な赤色唇弁をもつものが含まれていることは十分にあり得ることだ。そのような個体を選別すると、「オリビア」になるだろう。しかし、そのような単為生殖が発生してしまった場合、その「オリビア」は、遺伝子の上では、セラピアス・オルビアまたはセラピアス・コルディゲラだということにならざるを得ない。

結論として、セラピアス・リングア「オリビア」は、セラピアス・オルビア（セラピアス・コルディゲラの一種として分類する立場ではセラピアス・コルディゲラ)だと考えるべきだと思う。